
魔法少女リリカルなのは ~ 憎悪の戦士と神龍の騎士 ~

japan17

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～憎悪の戦士と神龍の騎士～

【Nコード】

N4707Y

【作者名】

japan17

【あらすじ】

一人の少年は魔法を持つ者達により家族を失い、代わりに果てしない憎悪の心を手に入れた。

一人の少年はいくつかの力を残し、他の全てを失った。家族となった二人の少年は出会う。

願いを叶える宝石と、それを求める少女達と。

それは、果てしない闘いの始まり。

憎悪の心を持つ少年の救済と、思い出を失った少年の再生を促す闘いの始まりだった。

始まり 〜プロローグ〜 (前書き)

どうも。

Japan17です。

はじめましての人も、「なんだ、お前か」って人もどうもです。

作者の厨二とりりなの好きのせいで、投稿しました。 まだ、デビュー作も完結してないのに……。

とまあ、こんな駄目作者の作品ではありませんが、どうか温かい目で見ただけたらと思います。

では、超短いプロローグをどうぞ。

始まり　くプロローグく

くプロローグく

記憶力には自信がある。

だから、今でも時々夢に見る。

あの日、業火の中。　血の海に沈んだ父と母の身体を。

それを呆然として眺めていた自分を。

それが、「魔法」と呼ばれる力を使う連中による仕業だということも。

その日から僕の中にこの感情が生まれたことも。

限り無い、憎悪の心が生まれたことも、今でもよく覚えている。

俺には、過去の思い出という物が無い。

気付いた時には、既に何も無かった。

思い出すことも出来ない。

かつては不安に駆られた。

だが、今はどうでもよくなっている。

血の繋がりこそ無いが、家族が出来たから。

だから、俺はこの力を使うんだ。

何も無い俺に唯一残された、
一対の神龍と共に闘うこの力を。

魔法少女リリカルなのは
憎悪の戦士と神龍の騎士

始まります。

始まり 〜プロローグ〜（後書き）

いかがでしたか？

短いでしょうか？

基本、更新は不定期ですが、がんばって書いていききたいと思うので、どうかよろしく願います。

それでは。

第一話「序曲」(前書き)

どうも。j a p p a n 1 7です。

早速、第一話を上げました。
例によって短いですが・・・。

では、ごんげん。

第一話「序曲」

「……………眠っ」

いつも通りの朝。僕、

「蓮丈れんじょう直哉なおや」は、消えない眠気と共に目を醒ます。

まったく。この眠気だけはいつまで経っても慣れないよ。

なんてことを、柄にもなく考えてしまっ、小学三年生の僕、蓮丈直哉です。

「ライナは……………さすがに起きたか」

そう言い、僕はベッドから下り、制服に着替える。

着替えを終えて、鏡でおかしな所が無いか確認。それも終えて、最後に机の上に置かれた、縦長六角形の蒼い宝石……………母さんの形見を首から下げ、部屋を出る。

向かうは一階。朝食の準備をしているであろう、同居人 正確には、僕の家族の下へと向かう。リビングに入ると、味噌汁の良い匂いがしてきた。

「ライナ、おはよう」

台所にいる家族に声をかける。

「ああ、直哉か。おはよう」

そう僕に挨拶を返す少年の名は「ライナ」。

わけあって、この家で一緒に暮らしている。

歳は僕の二つ上だ。

挨拶を終えてテーブルを見ると、もう既に食事のほとんどが用意してあった。

「ごめんな。いつもご飯の用意、一人でやらせて」

「本当にそう思うなら、もっと早く起きろ」

「それは無理。僕、低血圧だもん」

そんな他愛の会話と共にライナを手伝いながら、席に着く。

献立は、焼魚におひたし、たくあんに大根の味噌汁か。いつもながら美味そうだ。

「あ、そうだ直哉」

「ん〜？『アルビオン』と『ヴリトラ』なら、まだ寝てると思うよ？」

「・・・そうか」

席に着いた後、そんな会話が広げられる。アルビオンとヴリトラとは・・・まあ、我が家のペットみたいなものだが、2匹については、またいつか。

「じゃあ、そろそろ・・・」

「ああ。だな」

二人で手を合わせる。

「いただきます」

私立聖祥大学附属小学校。そこが僕が通っている学校だ。

いつも通りの道を通り、いつも通りのバスに乗って、学校に向かう。

「おつす、直哉」

「おはよ〜」

爽やかな笑みを浮かべながら挨拶をする友人、

「進藤^{しんどう}蛸^{けい}」と、ちよつとゆるい雰囲気をもったもう一人の友人、

「日向^{ひなた}社^{やしら}」の二人とバスを降りたところで合流。一年生の頃から
の付き合いの親友達と共に、校舎へと向かう。

何も変わらない。

いつも通りの日常。

これまでも、これからも。

そう。変わらないはずだった。

この日の夜、あの声を聞き、彼と、そして何より。

彼女と出会い、忌み嫌っていた力を持つことになる、今夜までは。

第一話「序曲」（後書き）

いかがでしたか？

今回は掴みみたいな感じなので、W主人公と直哉の友人二人を出してみました。

ちなみに、蛭と社の立ち位置は、完璧にアリサとすずかです。

キャラ紹介なんかは、デバイスが出て、ある程度物語が進んだらにしようと思っています。

では、今回はこの辺で。

次回はなのはとユーノ出せるかなあ・・・。

第二話「不屈の心、憎悪の心」（前書き）

第二話投稿です。

思ったたよりも、筆が進むのなんの・・・おかげで、やたらと長く・・・はい。

まあ、それはさておき。

今回は、みんな大好き、魔王様と淫獣君が出てきます。

それでは、どうぞ。

第二話「不屈の心、憎悪の心」

いつも通りの日常。授業が終わり、皆が続々と教室から立ち去っていく。

かく言う僕もその一人だ。友人の蛍や社と一緒に、荷物をまとめて教室、そして校舎を出る。

「いや、やっぱり眠くなるよな、授業中」

「うん。わかるよ、その気持ち。どうしてあんなに眠くなるんだろ
うね、直哉？」

「いや、僕に振るなよ」

けどまあ、授業中は凄く眠いというのはよくわかる。僕だって、何
回落ちそうになったかわかったもんじゃない。

「それで？今日はどうする？ また蛍の家で人生ゲームでもするか
？」

「え。いいよ、人生ゲームは。ぶっちゃけ飽きたし」

「バツカ、お前。人生ゲームは人類の叡知が生み出した究極のボ
ードゲームだぞ！ あんなに奥の深いゲームなんて、世に2つと無え
んだぞ！ おわかり！？」

「「究極W」」

「キーンッ!!」

蛭が髪を掻きむしりながら絶叫する。いや、人生ゲームが面白いのは認めるけど、蛭ほどのめりこむのも、どうかと思うわけで。

そんな感じで蛭をいじりながら歩いていると、数人の女子グループが視界に入った。

「お。聖祥の三大美少女だ」

蛭の言葉に、僕達は足を止めてその3人を見る。

栗色の髪をツインテールにした女の子を中心に、左に金髪のロングヘアの子、右に紫色の、ウェーブがかかったロングヘアの子が並び、仲良さげに歩いていた。

「高町なのは、アリサ・バニングスに月村すずか・・・か」

その3人は、「聖祥の三大美少女」と呼ばれるほどに容姿が整っており、非公式ながらファンクラブが存在するとかしないとか。

「はあく。相変わらず近寄りがないな、あの辺は」

「なに、蛭？近寄りたいの？」

「そりゃな。ちょっとは仲良くしたいとか思うわけで」

「でも、下手に言い寄ったりしてみなよ？ 非公式の連中にやられるよ?」

「そつなんだよなあ・・・」

「直哉は?」

「あ?」

「あの3人と仲良くしたいな?。とか、思ったりしないわけ?」

「・・・」

同じクラスってだけで、他には接点も何も無いのに、仲良くする必要も無いしな。

「いや、僕は別に無いな。そついうのは」

「だってさ。諦めなよ、蛭」

「わ、わかってるよ」

蛭が目に見えて凹んでるな・・・よし。

「・・・それにね」

「」「」「」

「別に、あの3人と仲良くしなくても、僕には蛭と社っていう最高の友達がいる。これ以上は欲張り過ぎだと思っんだ」

「……………」

「……あれ。言葉の選択間違った？」

「……直哉、お前ってヤツは……」

「え？」

「あはは……なんで、そんな恥ずかしいセリフをさらっと言えるんだろうね……」

「……うん。確かに恥ずかしい。顔が熱くなってるのがよくわかる。」

「ははっ。じゃあ、この後、俺の家行こうぜ」

「いいけど、俺も直哉も、人生ゲームはやらないよ？」

「わかってるよ。だから、それ以外のなにな」

「……………ああ。じゃ、速く行こうぜ、蛭、社！」

「おう！」

「あぁっ！ ちょっと待って！」

走り出す僕と蛍を慌てて追いかける社。

そうさ。

別に、わざわざ新しく友達を作る必要も、誰かと仲良くしておく必要も、どこにも無い。

大切な、大好きな友達がいる。

僕には、それだけで十分なんだから……。

「ただいまー」

すっかり暗くなった時間、僕は蛍の家から帰ってきた。ちょっとハッちゃけすぎたせいか、結構腹が減っている。

「帰ってきたのか。お帰り、直哉」

「ただいま、ライナ」

これから夕飯の準備でもするのだろつ。エプロンを着けたライナが出迎えてくれた。

『む。帰ってきたか』

『お帰り、直哉』

「ああ、アルビオン。ヴリトラも、ただいま」

リビングから出て来たのは、手の平サイズの大きさで、前後四本の脚と二枚の翼。長い尻尾にトカゲっぽい目と数本の角のある頭部を持つ、白と黒の生き物……。

所謂、「ドラゴン」って奴である。

白い方の名前が「アルビオン」、黒い方が「ヴリトラ」という名前だ。

どちらも、ライナがこの家に来た時には、既にライナと一緒にいた。

曰く、「ライナは自分達が仕える主」だそうだ。

まあ、疑う必要も無かったから、今では我が家のペット、家族の一員だ。

ちなみに、この家には、母さんの元同僚で、僕達の育ての親がいるが、基本仕事で家にいるのはごく稀だ。

余談だが、ある事情により、ライナは通信教育で普通の学校の授業を受けている。

「直哉。先に風呂に入ってきたらどうだ？ 夕飯が出来るまで、まだしばらくかかるから・・・」

やっぱり、そう言うと思ったた。

「いや、今日は僕がやるよ。ライナが先に風呂入っちゃって」

「・・・珍しいな。何か良いことでもあったのか？」

「まあね」

友達の素晴らしさを再確認してきたところだよ。

「じゃあ、任せていいか？」

言いながら、エプロンを僕に渡してくるライナ。

「ああ。お任せ」

「すまない。よし、アルビオン、グリトラ。風呂入るぞ」

『承知しました』

『あいよ〜』

そうして、みんなで風呂に向かっていく。

さて。献立は何にしようかな〜。。。

『……………れか』

「……………んあ？」

もう夜も更けたその日の晩。入浴も学校の宿題も終え、自室でくつろいでいると、不意に声のようなものが聞こえた。

「・・・気のせいかな？」

『誰か・・・聞こえますか・・・？』

また聞こえた。てか・・・！

「気のせいじゃねえぞこれ！」

反射的にベッドから跳び降りる。

「・・・何の声だ・・・？」

『誰か・・・この声が聞こえたら、力を貸してください・・・危機が、すぐそこに・・・』

「危機・・・？」

もう一度耳をすませてみるが、もう声は聞こえなかった。

「・・・行ってみるか」

もしかしたら危険なことが起こるかもしれない。

けど、誰かが困ってんなら、力を貸す！

蓮丈家家訓、第一条だ！！

「そうと決まれば、即行動！ 善は急げ！」

そう言つて、部屋のダンスから薄手のジャンパーをひっ掴んで羽織ると、僕は蹴破る勢いでドアを開き、外へ飛び出す。

「え、ちよつ、直哉!？」

「ごめん、ライナ! ちよつと出てくる!」

「出てくるって、今何時だと・・・おい!」

ライナの制止を聞き流し、僕はダッシュで声の主の下へと向かう。

場所などわからない筈なのに、自然と足は止まること無く、目的地・
・動物病院へと向かっていた。

「・・・なんじゃこりゃあ・・・」

思わず某俳優の名言を口にしてしまうほど、僕は目の前の光景に圧倒されていた。

なんてったって、馬鹿デカイ化物が暴れ回っているのだから。

「・・・違う、か」

そう、違う。

正確には、目を逸らしたかっただけなんだろう。だって、目の前で起きている現象の正体を一言で表すとしたら……。

「魔法……」

魔法。

マンガや小説でよくある力。

一般的には、炎や雷を操ったり、自然現象をも自由に起こせたりも出来る代物。

憧れたことが無いと言えば、嘘になる。

でも、僕が魔法に憧れた理由は……。

僕が魔法を求めた理由は……！

『うわああッ!!』

「!?!」

思考に囚われている内、目の前にいた怪物から逃げ回っていた、オレンジ色のネズミっぽいのがこっちに飛ばされてきた。

<ガスッ!>

「いぎっ?!」

避けきれずに、僅かながら足にかすめてしまったが、立てないほどのダメージじゃない。

『だ、大丈夫ですか!?!』

「ああ、なんとか・・・」

言いながら、ゆっくりと顔を上げていく。

「・・・・・・・・・・へ?」

「ふえ?」

顔を上げた先にいたのは、目と口を丸にして、呆けた顔でこちらを見つめる・・・

「……高町なのは？」

Sideなのは

な、なんだか凄いことになってるの……。

……はっ!？

あ、わ、私、高町なのはです。

お家でゆっくりしていたら、不思議な声が聞こえてきて、それどこに来たら、今日の夕方に助けたフェレットさんがおっきな怪物に襲われていたの。

「助けなきゃっ!」

って思ったんだけど、他に誰かが来て、フェレットさんと一緒に逃げ回る内に、こっちに跳んで来ました。

『だ、大丈夫ですか！？』

フレットさんが喋った！？

「ああ、なんとか・・・」

フレットさんと一緒にいた人は男の子でした。
見た感じ、私と同年くらいかな？ そう思っていたら、その人が
ゆっくりと顔を上げて・・・。

「・・・・・・・・へ？」

「ふえ？」

あれ？ この人の顔、どこかで見たことあるような・・・。

「・・・・・・・・高町なのは？」

私の名前を知ってる？ていうか、そうだ。この人の名前ってたしか
・・・。

「蓮丈・・・・・・・・直哉くん・・・・・・・・だっけ？」

S i d e 直哉

あつれー？　なんで高町がここにいるんだー？
ていうか、意外なことに、名前知られてたよ。

なぜかちよつと感動。

「えと・・・蓮丈くんは、どうしてここに？」

なんて考えてたら、同じ疑問を高町に聞かれた。

「ああ、このネズミの声が聞こえてきてさ。んで、その声の主を探してたら、ここについた」

「・・・ネズミ？」

ん？なんだろう、訝しむような視線が・・・。

「ああ、こいつ」

言いつつ、ネズミの首根っこを摘み上げる。

「・・・あゝ・・・えつと・・・」

・・・あれ？　なんで苦笑い？

「えつとね？　蓮丈くん」

「？」

なんだ？

「その子・・・ネズミじゃなくて、フェレットっていうんだけど・・・」

「・・・え」

なん・・・だと・・・？

「・・・知らなかったんだね」

「・・・うん」

・・・ヤバイ。

超恥ずい。

高町の優しい視線が尚更辛い。

『・・・あのー・・・』

「？」

『お取り込み中にとる悪いんですけど・・・奴、来てますよっ』

「？」

「ひゃっ」とかって声が聞こえたけど、無視。

「で、方法は？」

『・・・君と彼女には、素質がある』

「・・・素質？」

手頃な大きさの樹に身を隠し、フェレットの言葉に耳を傾ける。

『そう。だから、お願いします。僕に力を貸してくれませんか？』

「・・・」

高町も、神妙な面持ちでフェレットを見つめる。

『僕は、ある探し物のために、この世界とは違う、別の世界からやってきました。』

探し物・・・ねえ。

『けれど、僕一人の力だけじゃ、それは叶わないかもしれない・・・』

「・・・だから、素質を持つ人に、力を貸してもらおうって？」

『・・・』

沈黙は肯定なり・・・当たりか。

『お礼はします、必ずします！ 何であっても、必ず！』

「フェレットさん……」

「……はあ」

高町はきつと、協力するだろうな。だったら……。

「わかった。で、何をすればいい？」

「え？」

『い、いいんですか！？』

予想外だったのか？ 僕の答えに。

「もう乗りかかった船だ。やれるだけのことはやってやるよ」

そうして、高町の方を向く。

「高町もいいよな？」

「うん……うん！」

決まりだな。

「それで？」

「私たちは何をすればいいの！？」

『僕の持っている力を、君達に使ってほしいんだ・・・けど』

「？ 何かあるのか？」

『僕が持っている力は、一人分しか無いんだ。だから、どちらか一人にしか・・・』

・・・そういうことは、もっと早く言おうぜ。

「ええっ！？ じ、じゃあ、どうすればいいの!？」

はあ・・・ま、妥当だな。

「高町。お前が貰え」

「え・・・?」

『じゃあ、君は・・・!』

「実を言うと、魔法にはある程度理解があるんだ。けど、だからって戦えるかどうかは怪しいもんだ。だから、確実性の高い、高町がやった方が良い」

「だけど・・・」

『彼女一人じゃ、危険すぎます!』

「じゃあ、どうしろってんだよ！ 他の力は無いんだろ!？」

このままじゃ、いつまでも平行線だ！ しょうがねえ、こうなった

ら無理矢理・・・！

『マスター』

「『』・・・え？」「」

なんだ、今の声・・・どこから・・・？

『ここです。我がマスター、直哉』

ここって・・・僕の首元の？ って！

「まさか!？」

ある結論に行き着いた僕は、服の中から母さんの形見の宝石を引っ張り出す。

見ると、宝石が僅かに明滅するように発光している。

『これは・・・デバイス!? どうして・・・』

「わからない・・・母さんの形見の宝石が、なんで・・・」

『マスター。詳しい説明は後で行います。今は、あの異形を止めることに専念しましょう』

「あ、ああ」

『そちらのお二人も構いませんね?』

「『は、はい!』」

おお、すげえな、こいつ・・・。

『それじゃあ、君にはこれを』

そう言うと、フェレットは首に提げていた赤い、丸い宝石を高町に渡す。

「暖かい・・・」

『それを手にして、眼を閉じて。集中して、僕の言葉を復唱して』

『うん』

S i d eなのは

フレットさんに渡された宝石を胸に抱える。すると、不思議な何かが流れてきた。

『いい？　いくよ！？』

「うん！！」

『我、使命を受けし者なり』

「我、使命を受けし者なり」

『契約の下、その力を解き放て』

「えと、契約の下、その力を解き放て」

凄い……呪文の度に、暖かい力が、さっきより強く、流れこんでくる……。

『風は空に、星は天に』

「風は空に、星は天に」

流れこむ……うっん、違つ。きつと、目覚めているんだ……。

『そして、不屈の心は』

「そして、不屈の心は」

『「この胸に!!」』

私とフレットさんの声が重なった瞬間、宝石が一際大きく輝いた。

『「この手に魔法を！ レイジングハート、セーット、アープ
……」』

『Stand by ready・set up』

S i d e 直哉

おお・・・なんか、すげえな・・・。

『マスター、我々も』

「え？ あ、ああ。えっと、僕もお前に続けばいいのか？」

『いえ、マスターの頭に浮かんだ言葉を唱えていただければ、それで十分です』

「頭に浮かぶって・・・ツ!!」

な、なんだ・・・頭の中に、何かが・・・!

『さあ、マスター!!』

「くっ・・・わかったよ!!」

我、宿命を背負いし者なり

血盟の下、その力を解き放て

闇は胸に、光は天空そらに

そして、憎悪の心はこの胸に!!

「この手に力を・・・!」

最後の呪文を唱え終わる。それと同時に、胸の奥に、何か熱い力が流れこんできた。

ああ、わかる。よく覚えてる。

この感覚は、あの時と同じだ。

父さんと母さんが死んだ時に感じた、あの感覚だ。

「イーヴィルハート！ セーット、アープ！」

『Stand by ready・set up』

今ここに、不屈のエースと憎悪の戦士が誕生した。

第二話「不屈の心、憎悪の心」（後書き）

はい、いかがだったでしょうか？

今回は、直哉の日常の一部とセットアップまでを書いてみました。ちょっと無理矢理な気が、しないでもないですが……。

ていうか、なのはの呪文って、あれでよかったかなあ……。なにせ、無印の知識、セリフの全てまでは把握してないもので……。

ちなみに、気付いた人もいると思いますが、直哉の口調が、日常パートと真面目パートで微妙（？）に違います。

が、これは仕様です。はい。ミスとかじゃないですよ？ ええ。

長々と後書き書いちゃいました……。

何か気になった点や、ご意見やご感想があれば、是非お願いします。

それでは。

第三話「初戦闘と新たな影」(前書き)

第一話で若干のミスを見つけたので、修正しました。

第三話、投稿っす！

はい、意味無くテンション上げてみました。

最初の反省から脈絡が何も無い。

馬鹿野郎ですね、はい。

それはそれとして(オイ

今回は直哉となのはの初の共同作業(笑)です。

どうぞお楽しみください。

第三話「初戦闘と新たな影」

Side直哉

『音声認証による、リミッターの一部解除を確認。マスター権限を旧マスター、「リーシャ・シリス」より、新マスター、「蓮丈 直哉」へ完全に譲渡。それに伴い、戦意高揚抑制のプログラムを発動、これより戦闘形態へと移行します』

頭に直接、イーヴィルハートの声が響く。それと並行して、胸の奥に溜まっていた力が全身に染み渡っていくのを感じた。

知識に乏しく、経験は無くても、感覚でわかる。

これが、イーヴィルハートの・・・

「魔法の・・・力・・・」

父さんと母さんを殺した力。

今まで、忌み嫌いなながらも、心のどこかで欲していた力。

それが今・・・。

「僕の・・・手に・・・！」

『戦闘時における基本形態、スタッフフォームを展開。同時に、バリアジャケットも展開します』

途端、僕の全身を光が包む。それが晴れると、僕の身体は黒いシャツにズボン、両腕にはガントレットが着いており、両の足には脛当てがあった。

腰からは、スカーフのような物が伸びて、胸には胸当てが装着されている。

まるで、魔法使いというより、「戦士」という単語の方がしっくり来る姿になっていた。

ふと右手を見ると、そこには、柄が黒く、先端部分には×の形に組まれた銀色の棒。その中央には、さっきまで宝石だった、イーヴィルハートのコアがはまっている杖が握られていた。

「すごい・・・なんか、力が止めどなく溢れてくる・・・」

力を身体に馴染ませるように、少しストレッチの要領で身体を動かす。

あちこちに鎧のような装甲が施されているから、動きにくいと思っただけ、そういうわけでも無いみたいだ、恐ろしいくらい馴染む。

「ていうか、今さっき言ってた、旧マスターの名前・・・」

『そうです、マスター。かつて私は貴方の母君、リーシャ・シリスの力・・・デバイスとして稼働していました』

母さんのデバイス・・・てことは

「母さんも魔法使いだったってことか」

『「魔法使い」という言い方には、少々語弊があります。我々のよ

うなデバイス・・・魔法を行使するための武器を用いる者は、我々の世界では、「魔導士」と呼ばれています』

「魔法使いじゃなくて、魔導士・・・か」

『はい』

じゃあ、父さんや母さんを殺した連中も、魔導士ってことか・・・。

これで僕も、奴らと同類、か。

「まあ、いいか」

そう。別に構わない。力が手に入ったのだから。

『マスター』

「ん？」

『彼女の方も、準備が整ったようです』

イーヴィルハートの言葉に耳を傾け、高町の方を見ると、そこにはイーヴィルハートとは、真逆の色合いの　　白い柄に、先端部には金色の台座、その中央に紅い宝石がついた　　杖を手に持ち、これまた僕とは真逆の色合いの服（バリアジャケットだっけ？）に身を包んだ高町が立ってこっちを見つめていた。

・・・どうでもいいけど、あの服、学校の制服にちょっと似てるな・・・。

『本当にどうでもいいですね』

「心読まれた!?!」

恐れ! なんだコイツ?!

『あなたのデバイスですが?』

「だから心を読むなって!」

ああ、もう! 自分のマスターのプライバシー無視か!?

「あの……」

そうしていると、高町が不安そうに話しかけてきた。

「ん? ああ、ごめん、つい」

「う、ううん。別にいいんだけど……あ、紹介するね。このフェレットさん、ユーノくんって言うんだって」

『ユーノ・スクライアです。スクライアは、僕の出身の部族の名ですけれど』

「それで、この子が、レイジングハートっていうの」

『よろしくお願ひします』

フェレットがユーノ、デバイスがレイジングハートか。こっちも自己紹介はしないとな。

イーヴィルハートとレイジングハートが同時に声を発した。

『Fatal guard』

『Protection』

二人（？）の声が響いたと思ったら、僕の前には紅色が混じった黒色の、高町の前には桃色の壁が展開され、化物の攻撃を弾いていた。

「これが・・・」

「魔法、か・・・」

『魔法の発動に必要なのは、術者の精神エネルギー、それを触媒に、魔法を発動します』

『簡単な攻撃や防御なら、願うだけで発動できます』

『しかし、更に大きな魔法の発動には、呪文が必要になるのです』

ユーノの簡単な説明にレイジングハートとイーヴィルハートが続く。

「なるほどね・・・んで？ 聞きそびれたけど、あの化物はなんなんだ？」

『あれは忌まわしき力によって作られた存在。あれを元に戻すには、その杖を使って封印しなきゃいけないんだ』

「封印って……どうすればいいの?」

『マスター。貴女の中に、それに必要な呪文があるはずですよ』

「私の中に……?」

思案中の高町達を横目に見ながら、こっちも会議を始める。

「なあ、イヴィ。封印つつても、まずは動きを止めなきゃ話にならないよな?」

『ええ、その通り……イヴィ?』

「ん? ああ、イーヴィルハートじゃ、長くて面倒だからさ。そう呼ばせてもらっけど、いいか?」

『……イヴィ……です、か……イヴィ……イヴィ……』

「?」

僕が名付けた愛称を反芻するイヴィ。

「どうした? もしかして気に入らなかったか?」

『……いえ。そんなことはありません。素敵な名をありがとうございます、マスター』

「……どうやら気に入ってくれたようだ。

「よし! じゃあ、改めてイヴィ。アレの動きを止めるには、どう

すればいい?」

『はい。普通なら、拘束系の魔法を用いるのですが、今のマスターでは制御が難しいと思います』

だろうね。なにせ、今さつき魔導士になったばかりなんだし。

『ですので、今から初期の攻撃魔法で、あの異形の動きを封じます』

「わかった!」

『では、マスター。私を構え、集中を!』

その言葉に、僕はイヴィを水平に構え、意識をイヴィに傾ける。

『唱えてください、マスター! 敵を砕く弾丸の名を!』

力が身体を駆け巡る。

そして同時に、魔法の名が頭の中に浮かぶ。

「ブレイクシューター!」

『Break shooter』

途端、僕の周りに先程の壁と同じ色をした、光の弾丸が四発現れる。その弾丸を、明確な敵意を持つ化物に向け、固定する。

「シュートオ!!!」

『shoot』

そして解放された魔力の弾丸は、四発とも吸い込まれるかのように化物に直撃した。

Gyyyyyyyyyy!!??

予想外の攻撃だったのか、化物にかなりのダメージが通っていた。

「よし! 高町、頼むぞ!」

「う、うん!」

僕が一步下がると同時に、レイジングハートを構えた高町が踊り出る。

「リリカルマジカル!」

『封印するは、忌まわしき器、ジュエルシード!』

「ジュエルシード、シリアル????! 封印!」

『sealing』

ユーノと高町、レイジングハートが封印の呪文を唱えて魔法を発動すると、化物は姿を消し、そこには蒼いひし形の宝石が転がってい

た。

「これは……?」

『それが僕の探し物………忌まわしき器、ジュエルシード』

「忌まわしき器、ねえ……」

こんな小さい宝石が? と言いたいところだが、今までの現象を見る限り、かなりの危険物なんだろうな、コレ。

「それで、ユーノくん。これはどうすればいいの? 放っておくと危ないんだよね?」

『あ、うん。レイジングハートでそれに触れて。そうすれば大丈夫だから』

「わかった」

そう言うと、高町はレイジングハートでジュエルシードに触れる。すると、ジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれていった。

『……これで、封印完了』

「……ふええ〜」

ユーノの言葉を聞いて気が抜けたのか、高町はその場へたりこんだ。

それと並行して、レイジングハートとイヴィは元の宝石に戻る。

「・・・なんかどつと疲れたな」

「うん・・・大変だったね・・・」

『・・・すみません・・・こんなことに巻き込んで・・・』

「ううん、ユーノくんが気にする事じゃないよ」

「そうだよ。僕達が勝手に関わったんだ。謝ることなんて無い」

『二人共・・・ありがとう・・・』

和やかな雰囲気の流れる。だが、そういう時間ほど、結構簡単にぶち壊されるわけで・・・。

ウー・・・ウー・・・

「・・・サイレン？ パトカーの？」

『・・・こつちに向かってる？』

「・・・まあ、あんだだけ派手に暴れればなあ」

瞬間、二人と一匹でアイコンタクト。僕らが下した結論は一つだ。

「『逃げよう!』」

言いが速いか、すぐさま僕は高町の手とユーノの尻尾をひっ掴み、その場から自己ベストかと思うくらいの速度で退散した。

Sideなのは

「はぁ・・・はぁ・・・ここまで来れば、大丈夫、だろ・・・はぁ・・・」

直哉くんを手を引かれ、私はさっきまでいた森の中から、家の近くの住宅地まで走って逃げてきました。

直哉くん、足速いんだなあ……。

「さて。かなり時間がかかったし、早く家に帰らないと……」

「うん、そうだね」

言いながら、直哉くんと手を離す。

「そういえば、ユーノはこれからどうするんだ？」

「あ、それなら大丈夫。私の家で預かることになってるから」

『え？ そうなんですか？』

「うん。ごめんね？勝手に決めちゃって」

お父さんやお母さんにもちゃんと私がお世話するって、お話してるし、大丈夫……だと思う。

「そっか。なら安心だね」

そう笑って、直哉くんは私の家とは逆の方向に歩いていく。

「じゃ、ユーノの事、よろしくな、高町」

あ、やっぱり名字呼びのままなんだ。

「待って、直哉くん」

「!？」

私が呼び止めると、直哉くんはびっくりした様子で振り返った。

「な、直哉、くん？」

「あ、うん。せっかく仲良くなれたんだから、名前で呼びたいし、呼んでほしいんだけど・・・ダメかな？」

「仲良くって・・・ほんの何分か、一緒に不思議な体験しただけ・・・」

「ふえ？ でも私は、直哉くんと仲良くなれたかな？ って思ってるけど・・・」

そう言うと、直哉くんは可哀想なものを見る目で私を見ってきました。
すっごく失礼なの。

「はぁ・・・わかった」

「え？」

「名前で呼んでほしいんだろ？ いいよ、それで」

「う、うん」

「・・・じゃ。また明日、学校でな・・・」なのは「」

「……うん！　じゃあね、直哉くん！」

また明日！　と言って、私はユーノくんを抱えて、走って家に帰っていきます。

ふふっ　明日はアリサちゃんとすずかちゃんに、直哉くんのこと紹介しなくちゃ。

そんなことを考える内、家に着いた私は、ゆっくりと玄関の扉を開く。

「誰もいませんように……」

そう祈りながら、扉を開ききった私。

「………お帰り」

「………ただいま」

そんな私を出迎えたのは、鬼の形相を浮かべた私のお兄ちゃん、高町　恭也でした。

S i d e 直哉

それにしてもビックリしたな。いきなり高町・・・じゃない。
なのはが「名前呼びがしたい」なんて言いたすとは。しかも、「ま
た明日」とか言っちゃったもんだから、明日絶対挨拶してくる。し
かも名前呼びというオプション付きで。

「はあ・・・」

まあ、明日のことは、後で考えればいい。とりあえず今は・・・

「説教の途中で溜息とは、いい度胸だな少年？」

正座している僕を、かなりキレ気味の表情で見下ろす僕とライナの保護者、

「ニール・シリウス」さんの説教をどう掻い潜るかの術を模索しよう。

Side ?

海鳴市から少し離れた市内。そのビルの屋上に、一人の少女と一匹の狼が佇んでいた。

街から吹く風によって揺れる、自分の長い金色の髪を鬱陶しそうに払いながら少女は言葉を紡ぐ。

「・・・ここに、母さんの探し物が・・・?」

『ああ、間違い無いよ。ついさっき、発動を確認したからね』

少女の言葉に、その傍らに佇む狼が続く。

「そっか」

言いながら、少女は優しく狼の頭を撫でる。

「それじゃあ、早く見つけよう。蒼い宝石……一般名、ロストロギア、ジュエルシード」

その言葉と共に、少女と狼は暗い夜の闇の中へと消えていった。

第三話「初戦闘と新たな影」（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は初戦闘とその後を書いてみました。

こんな感じで良いのかなあ・・・。

ちなみに、この作品におけるデバイスの言語は

セツトアップ時や技名

英語

会話

日本語

ていう感じで進めていきたいと思えます。

誤字や脱字の他、ご意見やご感想などがあれば、ぜひお願いします。

それでは。

第四話「友達追加」(前書き)

第四話投稿しました。

・・・特筆すべきことが無いです。

それでは、どうぞ。

第四話「友達追加」

S i d e 直哉

「……………眠っ」

魔導士になった翌日の朝。いつも以上の眠気に襲われながら、蛭や社と一緒に学校へと向かう。

「直哉が朝眠そうなのはいつものことだけど……………」

「今日は輪をかけて眠そうだな」

「はは……………昨日の夜、ちょっとね」

あその後、一時間に渡って説教を食らった後、時間的な問題で解放された。

だが、解放直後に今度はライナからお説教だった。

いきなり家からとび出した僕のことを、かなり心配してくれていたらしい。素直に謝ってお礼を言ったら、しばらく僕が朝食の準備をすれば許す、と言われたので、渋々その条件を飲んだ。

え？ 断ろうとはしなかったのかって？

無駄だよ。基本的にライナは、自分が決めたことは曲げないんだ。何があるうともね。

「そんなわけで、僕は今、猛烈に眠いのである」

「「は？」」

そう言っただけで締め括ったなら、隣の二人から「いきなり何言ってるの、こいつ？」「みたいな視線が飛んできた。うん。きつと早朝と寝起きによるテンションのおかしさのせいだろう。僕は何も悪くない。

「まあ、直哉がおかしいのもいつものことだしな」

「そだね」

「ちよつと待てコラ」

僕がおかしいって？ おいおい、蛍よ。それはひどい勘違いってもんだよ。百歩譲って僕がおかしかったとしても、人生ゲームやっている時のお前よりかはマシだから。

「直哉。今、失礼なこと考えなかったか？」

「まつさかあ」

「.....(。.#)」

あ、その顔いいw

「てめえ、放課後覚えてるよ.....」

「はいはい」

放課後か・・・そういえば今夜、ニールさんが、なんか話があるって言ってたな。
やだなあ・・・。

O H A N A S I I じゃなきやいいけど・・・。」

「直哉。今の時点でそのワードはアウトだと思っよ」

「社がついに読心術を?!」

「いや、途中から声に出ってたから」

あ、そうなんだ。

その後、色々と雑談とかしながら学校に向かっていく。今夜の事とか、魔法の練習どうしようとか、ジュエルシードの事とか、色々考えながら。

だから、失念していたんだ。

昨日の一言のせいで起る、この後の騒動のことを・・・。

「あ。おはよう、直哉くん」

「・・・・・・・・」

教室の戸を開けて中に入る。途端に僕に向けてかけられる、ほんわかボイス。

それと同時に、僕の後ろから二つの驚愕に満ちた視線、正面にいる二人の少女　アリサ・バニングスと月村すずかから、キツめの視線と優しげな視線が向けられる。

だが、僕を閉口させるのは、そんな視線なんかじゃない。

それは殺気。

クラス中の男子から現在進行形で放たれる圧倒的なまでの殺気だった。

(き、気まずい……)

しかし、そんな僕的心情に気付くこと無く、この事態を引き起こした張本人……高町なのはは、こちらに向かって歩いてくる。

「直哉くん、どうしたの？」

こちらをやや上目遣いで見上げながら、高m……じゃない。なのはが尋ねてくる。

それに僕は、なるべく努めて平静を装いながら、挨拶を返す。

「いや、なんでもない。おはよう、なのは」

言った瞬間、180°方向転換を余儀無くされた僕は蛍に胸倉を掴まれ、激しく揺さぶられた。

「なんで?! え、なんで?! お前と高町、昨日まで何も無かったじゃん! 挨拶なんて一回もしたこと無かったじゃん! え、何!?! 昨日の今日でお前ら二人に何があったの!?!」

言いながらも、蛍は僕を揺さぶることをやめはしない。少し苦しくなってきたところで、社に助けを求めるのだが……。

「ついに異性に興味を持ったんだね?! やったね、直哉!」

などと、意味不明なことを口走っていた。

社。その言葉には、どんな意味があるんだ? 昼休みあたり、ゆっ

くり聞かせてもらおうか？

驚きのあまり、無意識に僕を殺しにかかる蚩と、鼻息を荒くして「そっちじゃないんだよね！」とか言い続ける社。

それを小首を傾げて眺めるのはと、呆れ顔のバニングス、苦笑いを浮かべている月村。

そして、未だ僕に殺気を浮かべ向け続ける一部の男子と、机に突っ伏している男子陣。

（カオスだ・・・）

素直にそう思った。

ちなみに、この騒動は担任の先生が来るまで続けられた。

でもって、昼休み。

いつものように、蛭や社と教室の隅で弁当を広げるはずだったのだが……。

「どろろしてこうなった？」

場所は屋上。

僕の目の前に座るメンバーは、高町なのは、アリサ・バニングスに月村すずかの三人。

蛭と社はいない。理由は単純。

昼休みに入った途端、僕だけがなのはに拉致……もとい、昼食を共にするよう誘われたからだ。

なのはに手を引かれ、月村に背中を押されながら教室から連れ出さ

れる僕を見ていたあの二人の脳内には、きつとドナドナが流れていたと思う。

「・・・なあ、なのは」

「ん？ なに、直哉くん」

「なんで僕はちゃんと知り合ってから、二十四時間も経ってない同級生とその友達二人と、長年の友人達をさし置いて、一緒に弁当を広げてるんだ？」

「んつとね・・・良い機会だから、アリサちゃんやすずかちゃんに紹介しとこうと思って。直哉くんのお友達の・・・誰だっけ？」

「進藤さんと日向くんだよ、なのはちゃん」

「あ、そうだった」

僕と違って名前覚えられてないよ、あの二人・・・何気に酷いぞ、高町なのは。

「それでね、直哉くんのお友達だし、せつかくだから誘おうかな？
とも思っただけど・・・」

「大勢でゾロゾロっていうのもどうかと思って、あたしが止めたのよ」

なのはの言葉にバニングスが続く。

「この子、男嫌い・・・？ いや、単純にガサツなだけか・・・？」

「あんた今、失礼なこと考えなかった？」

「・・・ソ、ソシナコトナイヨー」

「なによ、その喋り方・・・まあ、いいわ」

「それじゃ、改めて自己紹介しよつ。私、高町なのは」

「アリサ・バニングスよ。なのはを名前呼びしてるんだから、あたしの事もアリサでいいわ」

「月村すずかです。私のことも、すずかでいいから。これからよろしくお願いします」

三者三様に自己紹介してきた三人に、僕も返す。

「僕の名前は蓮丈 直哉。せっかく名前呼びでいいって言ってくれたから、僕の事は直哉でいい。これから、改めてよろしく」

言つて、軽く頭を下げる。

「わかつたわ。それじゃあ、直哉。単刀直入に聞くけど・・・なのはと、いつの間に仲良くなったわけ？」

名前を知るや否や、早速クラスの男子全員（僕除く）が思っているであろう疑問をアリサが聞いてきた。

「ああ、それな。昨日の夜、気晴らしに散歩に出かけてたんだ。そ

したら、なんか逃げてる風なフレットがいてさ。そいつ繋がりで、仲良く・・・みたいな感じ?」

真相は伏せておく。なのはが驚いているが、目線で黙らせる。言っただころでそう簡単には信じてはくれないだろうし、僕自信、知り合ったばかりなのに話すほど、この二人を信用したわけじゃない。

「ふうん、そうなの」

「じゃあ、ユーノくんのおかげなんだね」

あ、なんだ。もうユーノのこと知ってるのか。

「まあ、そんな感じで色々あってさ。今ここに至るってわけ」

言いながら、弁当に入っている卵焼きを口に運ぶ。

・・・うん。やっぱりライナが作った方がうまいや。

昼食を終えて教室に戻った時、蛍からは妬み、社からは生温かい、その他の男子からは殺気のコもった視線を受けたことを、報告して

おく。

「いつしよに帰ろ、直哉くん」

「・・・・・・・・」

放課後。帰り支度を整え、蛭と社に声をかけようとした矢先に例の彼女から素敵なお誘い。

向こうからしてみれば善意でやってるんだろうけど・・・・・・・・うん。真横にいる二人の親友からの視線が、男子連中の殺気よりもツライ。こんな時の解決策は一つだけだろう。

「あー・・・・・・・・うん、いいよ。じゃあ、こっちの二人・・・・・・・・蛭と社も一緒にいいか？」

「もちろん」

なのはがそう言った途端、男子連中からの殺気が蛭と社にも向けられる。だが、そんな視線に気付かず、蛭は満面の笑みで僕に詰め寄ってきた。

「ありがとう、直哉！ 俺達を除け者にするつもりは無いんだな！

「？」

「そうだけど、蛍。あんまり寄るな。キモい」

「持つべきものは、やっぱり親友だ！俺達はずっと親友でいような、なお＼へぶっ！？」

キモさが限界を超えたので、顎に小気味の良いフックを打ちこんでおいた。

床を転げ回る蛍を見下しつつ、社にも視線を向ける。

「直哉・・・やっぱり、女より、男の方が・・・」

即座に目を逸らす。なんだか、あの続きは聞いちゃいけない気がした。

「ほら、あんた達。一緒に帰るんだったら、遊んでんじゃないわよ」

「アリサちゃん、そんな言い方・・・」

呆れ顔のアリサと苦笑いのすすかが先に教室を出ていき、それに続いてなのはが出る。

遅れるのもあれなので、未だに床を転げ回っている蛍に蹴りを一発叩き込んでから引き起こし、社の手を引っ掴んで教室を出た。

「……と、いうわけで。俺は進藤 蛭。よろしく」

「俺の名前は日向 社だよ。よろしくね、三人とも」

「高町なのはです」

「アリサ・バニングスよ」

「月村すずかです、よろしくお願いします」

バス停への帰り道、蛭と社が三人と自己紹介しあっている。社はともかく、蛭の方は、ずっと話してみたいって言ってたからな。結構、感激しているだろう。

まあ、この分なら数日中には仲良くなれると思う。蛭とアリサ、社とすずかかって、お互いに雰囲気とか似てるし。

そんな空気の中、唐突に昨日も感じた妙な感覚を感じた。

（これって……）

ふと、なのはの方を見る。

彼女も感じたようで、意志疎通もかねて頷きあう。

「・・・悪い。僕ちよつと、用事があったんだ」

「「「「え?」「「「「

なのは以外の面々が僕に視線を向ける。

「そういうわけだから、僕はこの辺で!」

混乱するみんなをよそに、カバンを抱え直し、その場から走り去る。

「イヴィ、場所は?」

『この近くの神社かと思われれます』

「了解だ。走るぞ!」

「到着!」

ジュエルシードの反応を感じた神社に入る。

そこには……。

「……………まじか」

凶悪な外見と強靱な四肢、鋭利な爪と牙を持つ犬っぽい何かだった。

「でもまあ、ビビッてる暇は無えから……やるか！」

『オーライ、マスター！』

「イーヴィルハート！ セットアップ！！」

『Stand by ready・set up』

バリアジャケットを身に纏い、杖……イーヴィルハートを握る。

二回目の戦闘、速攻で終わらせてやる！！

第四話「友達追加」(後書き)

いかがだったでしょうか？

一気に戦闘終了まで行きたいところでしたが、キリが良いので「」までにします。

今回は、日常編を書いてみました。こうでもしないと直哉とアリサやすすかの出会いがやれなかったので……。

そして、二回目の戦闘。

次はきっと短いだろうなあ……。

あ、キャラ紹介の方は、市街地戦の後あたりにしたいと思ってます。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4707y/>

魔法少女リリカルなのは ~ 憎悪の戦士と神龍の騎士 ~

2011年11月20日18時47分発行